

【事例 H27-06-10】 三重県

精神障害の親と暮らす子供への支援事業 ～子供が支援を求めやすい環境づくり～

“精神障害の親と暮らす子ども”への支援事業として、精神障害の親と暮らす子どもが、安心して支援を求められる環境を整えるため、支援者研修や子どもへの集団支援（ピアサポート）、個別相談、啓発活動など総合的な取組を行った。

【実施主体】親&子どものサポートを考える会

【大綱の分類】6. 社会的な取組で自殺を防ぐ①

【事業予算】平成26年度 1,024千円（960千円）

【利 点】

- ① 支援の対象となる子どもへのアプローチだけでなく、支援者研修等を通して親子の理解を図ることで、周りの大人が親子の状況に気づき、支援に繋げることができる。
- ② 親子への対応に戸惑うことが多い支援者をサポートすることで、安定した支援に繋がる。

【実施に至るまで】

【背景・必要性・理由の概要・等】

現行の社会制度では、精神障害を抱える当事者への支援はあるが、その子供への支援はなく、不十分な養育によって子供が傷ついていても、見過ごされてしまう状況にある。これは、三重県に限らず、全国どの地域においても同様である。精神障害の親と暮らす子供がWebサイト上でやり取りする掲示板 (http://oyakono-support.com/keijiban_top.html) には、「こんな生活もう嫌だ」、「誰にも話せない」、「死んでしまいたい」など子供の悲痛な声が多数寄せられるが、その実態を把握する手段はない。こうした子供の存在や声なき声に着目してこなかったのが現状であった。

【計画を立てる上での工夫・等】

当初、実施していたのは概要にある③④⑤の事業であったが、これらの事業を展開していく中で、「自ら支援を求めにくい」ことなどがわかり、周りの大人が子どもの状況を察知し必要な支援に繋げることができるよう、①②を取り入れるなどニーズに合わせて事業を発展させてきている。

【事業の工夫点】

- ① 思春期年代の子供たちは、自身の置かれた境遇やそこで感じる気持ちをわかって欲しいと思う一方、不用意にそのことに触れて欲しくないという思いを持っている。そのため、面識のない本会スタッフが接近するよりも、面識のある人の介入が有効と考え、支援者の育成に力を注いでいる。支援者研修は、子供の理解を中心とした基礎講座、実際の支援方法を考える実践講座の2講座に分けて実施している。また、支援者の抱え込みや孤立を防ぐため、研修では、多職種連携の必要性についても伝え、グループワークなどを通して多職種と知り合う機会を設けている。

② 子供の集い・交流会では、スタッフは必要時に情報提供をしつつ、初回参加者のフォローなどを安全に運営することに主眼を置き、子供が安心して語れる場や同じ境遇の仲間同士によるピアサポートの場となるようにしている。

【具体的な内容・実施の過程】

具体的には、以下の①～⑤の活動を通して子供が支援を求めやすい環境づくりを目指す。

① 支援者研修会の開催

子供の身近に存在し、支援する立場にある者（教員、民生委員・児童委員、医療・福祉関係者ら）を対象とした支援者研修を開催し、精神障害の親と暮らす子供の生活状況や子供が抱える思いなどの理解を図り、状況に応じた支援が行えるようにする。

② 支援者間の連携、情報交換

精神障害の親と暮らす子供の支援に取り組む全国の機関が集まり、親・子の現状やそれぞれの取組を情報交換し、子供への支援をどのように繋げていくのかを検討する。

③ 子供への支援（集団）、ピアサポート

誰にも相談できずに孤独に過ごしてきた子供たちが、安心して思いを語り、同じ境遇の仲間と繋がりを持てる場として、「三重 子どもの集い・交流会」を1回／月のペースで開催し、精神的支援やピアサポートを行う。また、三重の集いに参加することが難しい全国の子供が仲間と繋がる場として「全国版 子どもの集い・交流会」を、利便性の良い都市（平成26年度は名古屋）で開催し、思いを共有し孤独を癒す場を提供する。

④ 子供への支援（個別）

集団が負荷となる子供に対する個別相談（精神的支援）の実施。

⑤ 啓発活動

子供の思いや上記①～④の取組を紹介するリーフレットの作成やホームページ開設により、「親＆子どものサポートを考える会」（以下「本会」）の存在や活動を知ってもらい、支援の必要な子供を本会に繋いでもらうなど、子供自身が「子供を支援する機関もあり、助けを求めてもよい」と認識できるようにする。

【成果】

・支援者研修参加者からは、「自分に何ができるか考える機会になった」、「他職種と情報交換する機会となった」など概ね良好なフィードバックが得られ、研修会の目的はある程度達成されたと考える。しかし、子供支援を念頭において実施している機関や多職種・多機関が連携して支援を行っているところは少数であり、多機関が情報交換・連携して支援していけるような、体制作りが必要である。

・子供の集い・交流会の参加者は、仲間を支えられることにより、「生きていてよかった」「自分の人生(語り)が他の人を勇気づけることができると知った」など、自己受容や自己肯定に繋がっており、自殺予防の一助になっていると思われる。

・本会の活動が浸透してくるにつれ、クリニック等から紹介も増えており、相談しやすい環境には近づいてきていると思われる。

【課題】精神障害の親と暮らす子供を対象とした支援は全国的にも実施されている機関が少なく、三重で実施している子供の集い・交流会には、県外からの参加者も多い。こうした子供支援

が各地で広まるよう、支援の有り方を広めていくことが必要と考える。幼い子どもは、自ら支援を求めたり、活動の場に足を運ぶことが難しい。身近な大人がこうした子どもの存在を知り、子どもの成長を見守り支えていく地域づくりが必要である。

【事業種別】 対面型相談支援事業、人材育成事業、普及啓発事業、強化モデル事業

【準備期間・人数】 支援者研修：案内期間を含め約3ヶ月・4～6人

支援者の連携・情報交換：企画・案内期間を含め約4ヶ月・5～6名

子どもの集い・個別相談：準備期間なし・1～2名

全国版子どもの集い：企画・案内期間を含め約6ヶ月・8～10名

【予防段階】 1次

【自治体規模】 人口181.5万人（平成27年10月）、財政規模736,626,813千円（平成28年）

【自治体負担率】 1/2

【事業対象】 若年者

【支援対象】 若年者

【実施主体・問合せ先】 鈴鹿医療科学大学看護学部内 土田幸子（精神看護学担当）

TEL 059-340-0855（研究室）

080-1569-3768（携帯）

E-mail: sachiko@suzuka-u.ac.jp

URL: <http://www.oyakono-support.com/>